

第1号ロータリークラブ誕生



シルベスター・シール

人類の起源は百万年前、といわれているが、もとより正否の程は分らない。象形文字の発祥によって初めて史上の記録がおぼろげながら残されるようになった。フェニジアで今日のアルファベットの基ができ、東洋文明と共に支那文字の出来によって、人類の記録は残されるようになった。しかしこの残された史実は現実の九牛の一毛にも及ばなかった。今日の世界文明の元は15世紀に始っておるともいわれているが、確かに記録はこれを証明し、以来年を追って歩一歩と前進している。近年になって、科学の進歩は驚異的なものとなったが、道義的進歩は必ずしもこれに伴っておるとはいえないようである。

道義の向上を目指すロータリークラブの第1号が1905年シカゴ市に生れた。その年こそ、アインシュタインがスイスのベルンで相対性原理を発表した年であり、活動写真館が

パストガバナー 宮 脇 富

米国ペンシルバニア州のピッツバーグ市に初めて設けられた年であった。

今日のように文字の進歩した時代であっても、重要な記録が完全に残されているとは限らない。最初に出来たロータリークラブの記録もその例にもれないようで、口述的な記録のみが残っているに過ぎない。シカゴ・ロータリークラブの初年度からの会員であったルーファス・エフ・チャピンは、当初のクラブ会合の様相について次のように述べている。

「自分がロータリーというものを知ったのはアル・ホワイトの友人である料理屋の主人ハリ・モーチマーからであった。彼はロータリークラブでは1つの職業から1人だけの会員を入れることになっていることを知らせてくれた。自分が入会を許されたことは非常に幸福であって、そのことで銀行業がクラブに代表された。初めわれわれは一緒に会に出掛けた。その会合の場所は旧シャーマンハウスと記憶している。われわれは円卓に坐った。

「自分のきいた処によると、この会合が晩餐を共にした最初であったとのことである。それは1905年の4月か5月、或は3月であったかも知れない。それまでは会員の事務所で会合していた。この晩餐会では何等の儀式も行なわれなかった。事実儀式的なことは一切禁物となっていた。

自分に対しては入会式のようなものは行なわれず、単に友好と職業交歓ということがクラブの目的であると教えられ、会員に自分が銀行屋であるということを紹介されただけであった。自分の第一印象は、当時の会員は何

れも自分が親しく知合いになりたいと思う人達のみであったということであった。今でもその印象は残っている。

「自己紹介は初めに採用された習慣であった。その目的はお互にその職業についての印象を植えつけ、それによってお互が職業上の交歓をなすことができるようにするためであった。

会合の最初は色々な娯楽、雑談、食事などで愉快に時を過ごすことであったが、時には事業上の難問題などを話し合うこともあった。

食事が終わってからは食卓を隅にかたづけ、

シルベスター・シール

ロータリー誕生の産婆役4人男の1人である、シルベスター・シールこそ、世界で最初に生れた、第1号ロータリークラブの会長であった。国際ロータリー第2代事務総長ラブリョイは、シルベスター・シールを20世紀の産んだ偉人の1人であると激賞している。

シルベスター・シールはロータリアンはもとより、一般社会の人々の良き友達、良き指導者として親しまれていた。幾百千の身障児の回復は彼が主唱して始めた特殊教育に負うところ大であった。不遇に悩まされた幾多の青年がシールに救われている。彼の実践した人格に学ばんとするものは数知れずあったといわれている。

彼は世の師表となる人物であった。1930年の大不況の年における彼の活動は目覚ましいものであった。当時、シカゴに公衆食糧局ができるまで、彼の事務所は慈善事業の取引所となっていた。彼は眼病で苦勞していたが、その苦痛の中でも、常に快活に、より良くより高く社会のため尽くすことにつとめていた。

自由に団団を造り、一寸形式的に事務的な行事が行なわれた。会員は自由に発言したものである。新会員の紹介には特段の力を入れ、そのためには色々な妙技が行なわれていた。これが習慣性になって会員が新工夫を凝らすようになった。」

この話が何処まで真実を伝えているかは明らかでない。例えば彼の話の中にあるモーチマーは1908年から会員になった人であり、彼が初めて会合に出た時にしても曖昧である。然しそれだけクラブ結成当時の確実な記録が残っていない証拠にもなるわけである。

シールは理想家であると同時に実行者であった。彼はまず家庭的に成功者でありかつ職業上の成功者でもあった。シカゴ市の社会事業には常に夫婦揃って奉仕したものである。シール石炭会社の社長としての彼は、38年間信用ある職業人であり、顧客から愛され従業員から親しまれかつ尊敬されていた。

シールは1870年インディアナ州クレイ・シティで独乙系の家に生まれた。その幼年時代は家貧にして、冬の夜も粉雪の吹き込む屋根裏に起居していたとの事である。朝の洗顔は水瓶の水を割ってとった水をもってした。彼が若人としてのあらゆる苦難の道を良く堪えたのは、この陋屋炉辺における修養であったのである。米西戦争中彼はキューバにおいてテレ・ホーテ学校に学び、後にシカゴに出て石炭小売業を始めたのである。

1896年に彼は、何がしかの金を友人に貸していたが、その回収の見当がつかなかった。その頃或若い弁護士が常に彼の店の前を通っていた。ある日彼はこの若い弁護士に事の次第を話し、その処置を相談したのであった。

かくしてポール・ハリスとのつながりが出来、お互に良き友達となり、結局それがロータリーとなり、今日世界における12,500ロータリークラブにおよぶ大世帯の先駆者となったシカゴクラブとして現われたのであった。

初めの頃は、ポール・ハリスとシルベスター・シールはシカゴのミシガン13丁目のニュー・サウザーン・ホテルの3階の一室を共用していた。日曜日には、彼等はともにフロックコートに山高帽の身装で出掛け、街をぶらぶら歩いて教会に行ったものであった。そして午後には公園を廻って帰っていた。

あたかもデモン・ピシアスのような親交は、如何に面倒な問題であっても必ず解決が出来たのであった。後には、シール夫人はハリスと、ハリス夫人はシールと常に手を取り合う同伴者となって、別れ別れになることのできない4人連となった。

ロータリーの共同創設者としてのシールが世界で第1号のロータリークラブの初代の会長となって数か月後、彼はハリスに対し、クラブの会員は何れもその職業について話すようにすることを提案したところ、ハリスは直ちにこれに賛成して、まず第1にシールに話をしよう要請した。それが今日ロータリーの慣例となっている職業奉仕の始まりであった。当時はこれを職業奉仕といわず、職業法

といていたのであった。

ロータリーに対するシールの貢献は、常に職業奉仕の計画だけではなく、社会奉仕についてもその熱意を示したことである。彼は特に青少年問題に興味をもっていた。彼は喜んで青少年の相談相手となったもので、助言を得るため彼の事務所や家庭を訪ねるものは引きもきらざる有様であった。

シールは理想家であるが故に、ロータリーの利他的奉仕計画が彼に強く訴えたことは当然である。いかなる運動においても、それが偉大なる効果を現わすには、その創始者の心の中には利他的観念がなければならぬものである。ポール・ハリスおよびシルベスター・シールの理想は、国際ロータリーが最後に成就すべき偉大なる建設物の最も実用的な礎石となったのである。

シルベスター・シールは、ロータリーの共同創始者であり、世界における最初のロータリークラブの初代会長であり、常にポール・ハリスの片腕であったにもかかわらず、その痼疾である眼病のためか国際ロータリーの会長とはならなかったが、それにも増してロータリーの基礎を造るに最も貢献した1人であった。彼はついに国際ロータリーの財務長の現職のまま、1945年12月17日に数知れない友人に惜しまれつつ、長逝したのである。